

〈研究ノート〉

高大連携による地域文化体験を通じた交流学习活動の教育効果

— 地域文化理解を目的とした高校生と留学生との交流を主軸として —

大塚 薫
林 翠芳

要 旨

本研究は、2017年度に外国人留学生対象の課外研修において高大連携による地域文化体験を通じた交流学习を実施し、その教育効果について考察し、地域との互惠関係の構築を目指した高校生と留学生の双方向型交流モデルを提案したものである。交流学习活動は、日本及び地域の文化・歴史等を学び、理解を深めるとともに、留学生間の親睦・交流を図ることを目的に行われている課外研修の中に、高校生との地域文化体験を通じた交流をプログラムの柱として実施された。

その結果、高校生と留学生との双方向型のインタビュー活動やグループワークによる交流を通して、両者にとって異文化理解や言語運用能力、自文化への気付きが促され、互恵的な学びが得られた。また、留学生にとっては、高校生に対して地域文化に関する聞き取りをすることで、地域の現状を学び理解を深め、地域の活性化への意見を有するに至った。このような地域との交流学习活動では、送り出す大学側と受け入れる高等学校側が密に連絡を取り合い、企画時から協働でサポートする姿勢が問われるとともに、継続的な交流を持ち、互恵的な関係を維持することが重要となる。

【キーワード】

高大連携、地域文化理解、異文化理解、交流学习、体験学習、教育効果

1. はじめに

高知大学は、地域のコアとなる大学として、「地域から世界へ、世界から地域へ、グローバルな双方向の国際連携を目指す」という国際戦略を掲げ、外国人留学生に対して地域課題に関する体験型プログラムを提供することにより、国際連携を推進するとの目標を設定している。

また、高知県も「地域創生」の言葉の下、地域の食・歴史・文化・伝統芸

能の継承並びに観光振興、外国人観光客への対応、経済効果を高める取組み、効果的な観光客誘致への取組み、商店街の活性化等と多くの地域課題を抱えている。高知大学は地域に根差す大学として、地域とともに学び・研究する「知の拠点」として、地域から世界に発信することが大学の使命であると言える。

このような背景の下、「地域の伝統文化を通じた観光振興」に関する教育を中心に、体験的な教育活動を通して外国人留学生を地域の振興に巻き込み、地域の活性化に貢献してもらうことが有効な方策だと考えられる。留学生は、地域課題の解決を試みることにより、地域とともに生きる自覚が生まれ、地域の一員として活躍することで地域の活性化に寄与することができるであろう。これに伴い、地域社会は、留学生を受け入れることによる付加価値、すなわち、これまでの地域社会による一方通行的な発信型（恩恵付与）にとどまることなく、留学生からの発信を受信（恩恵還元）するという、双方向送受信型の構築・互惠関係の樹立につながると考えられるからである。

本稿は、地域の大学に通う留学生というリソースを地域の振興等に役立てることに主眼を置き、地域住民との交流や体験的な教育活動を通して高知の文化を学ぶとともに、留学生の目線から地域の資源を見つめ、地域の活性化に寄与し、地域との互惠関係の構築を目指した高校生と留学生の交流学習活動のモデルを提案したものである。

高校生と留学生との交流学習の事例としては、日本人学生と留学生の共修授業の一環として高等学校を訪問しグループ対抗ゲームや盆踊り、大学生の「自分の大切にしているもの」の紹介を通じた英語による交流会の事例（宮本 2011）や初級レベルの留学生と高校生との自己紹介ゲームや国の紹介等の相互発表、調理実習・試食、テーマ別ディスカッション等を通じた国際理解学習会の事例（佐々木 2001）、高校生のコミュニケーション力を高めるために「やさしい日本語」で外国人留学生と文化的課題についてグループディスカッションをし共同でプレゼンテーションをする事例（坂口・村山 2018）が挙げられる。これら全ての活動は、佐々木（2001）の言う「地域等の要請に応じた派遣的交流活動」である「待ち型交流」ではなく、「学内外との共同企画の形で、あるいは留学生が在籍する教育機関がある程度企画を主導する形での文化体験交流」や「教育プログラムとの組合せによる交流的教育活動」である「提唱型交流」と見なされるが、本活動のように地域の高校生と留学生の双方向型の互惠的な交流により地域文化を理解し、留学生が地域の一員とし

での役割を担うことを目指しているものは見受けられない。

また、留学生がボランティアとして高校生・日本人学生とともに地域の文化である秋祭りに参加し文化遺産を地域の人と協力して守る活動の事例（生駒・Gehrtz三隅 2013）や高校生や留学生を含めた大学生を対象とした教育や人間形成の空間としての四国遍路の集団歩き実践の事例（梶井 2011）も、高校生と留学生との交流活動が地域をフィールドとした地域の人との関わりにより展開されている事例として挙げられる。しかし、佐藤他（2011）の「国際共修」の理念として挙げられる「日本人学生・留学生が共に参加し対等な立場で交流」すること、「異なる言語・文化圏を背景とする者同士が自他の文化を比較しつつ学ぶ」こと、「意見交換や共同作業を取り入れる」ことを鑑みると、高校生と留学生、地域住民が対等な立場での交流となっているとは言い難い。

そこで、本研究では、2017年度に外国人留学生対象の課外研修として、檜原町¹⁾と安芸市²⁾にて実施された高大連携による地域文化体験を通じた交流学習の教育効果について考察し、地域との互惠関係の構築を目指した高校生と留学生の双方向型交流モデルを提案していく。

2. 「地域文化・観光体験調査」の概要

2017年度に実施された外国人留学生対象の課外研修は、国際連携を推進するために提供される留学生対象の「地域課題に関する体験プログラム」の構築の一環として実施された。ここでいう「体験プログラム」とは、異文化や日本文化に対する理解を深めるための講義や高知の自然や文化に触れるために高知県内の施設や観光地を訪問し、本プログラムを通して日本人学生や地元の人々との交流促進のほか、高知県観光の魅力を発掘し、留学生の目線から地域の振興に関する提言をすることにより、地域活性化の糸口を探ることを目的としたプログラムのことである。

その「地域課題に関する体験プログラム」の基礎データを収集する目的で、地域文化・観光体験アンケート調査が、2016年8月から2017年2月にかけて、高知大学に半年以上留学している外国人留学生を対象に日本語で実施された。

以下、地域文化・観光体験アンケート調査の概要を記す。

実施期間	： 2016年8月～2017年2月
対象	： 高知大学に半年以上留学している外国人留学生72名 （中国：39名、台湾：10名、インドネシア：9名、韓国：7名、モンゴル：2名、 ネパール：2名、オーストラリア：1名、ロシア：1名、ウクライナ：1名）
使用言語	： 日本語
項目	： 観光文化体験、高知観光の改善点、日本文化・高知文化に対する理解度、日本人学生・地域住民との交流等
実施目的	： 高知大学に在籍する外国人留学生を対象に国際連携を推進するために提供される「地域課題に関する体験プログラム」構築に向けての基礎データ収集

2016年5月1日現在³⁾、高知大学には、21ヶ国・地域から146名の外国人留学生在籍していたが、対象は体験型授業が開講されるキャンパスで学ぶ人文社会科学部・教育学部・理学部を中心とした正規生並びに特別聴講学生（交換留学生）91名である（回答率79.1%）。回答してくれた72名の留学生の内訳は、中国が39名、台湾が10名、インドネシアが9名、韓国が7名、モンゴル・ネパールが各2名、オーストラリア・ロシア・ウクライナがそれぞれ1名であった。このうち、正規生は18名で、交換留学生は54名である。なお、留学生の日本語能力は、身分や専門、日本語学習歴に応じて日本語能力試験N3からN1までのマルチレベルであった。

アンケート調査の項目としては、「観光文化体験」、「高知観光の改善点」、「日本文化・高知文化に対する理解度」、「日本人学生・地域住民との交流」等を挙げ、意見の記述が主であったが、客観式回答では5段階で評価するとともに理由を記してもらった。

3. 「地域文化・観光体験調査」の結果

地域文化・観光体験アンケート調査を実施した結果を「日本・高知文化に対する理解度」、「日本人・地域住民との交流」、「高知地域の観光文化の改善点」に分けて述べていく。

3.1 日本・高知文化に対する理解度

高知大学への留学を通しての日本文化に対する理解度を5段階で評価してもらった結果は表1の通りである。5段階評価で3.0から5.0までばらつきがあるが、平均は4.02であり、おおむね理解できていることがうかがえる。

表1 日本文化に対する理解度

	中国	台湾	インドネシア	韓国	モンゴル	パキスタン	豪州	ロシア	ウクライナ	計
十分	10	2	3	1	0	1	0	1	0	18 (26.4%)
かなり	15	5	3	3	2	1	0	0	1	30 (44.1%)
普通	11	2	3	3	0	0	1	0	0	20 (29.4%)
あまり	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不十分	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平均	4.0	4.0	4.0	3.7	4.0	4.5	3.0	5.0	4.0	4.02

次に、留学を通しての高知文化に対する理解度を5段階で評価してもらった結果は表2の通りである。高知文化に対する理解度も平均4.00であり、日本文化同様の結果であった。さらに詳細に見ていくと、日本文化に対する理解度の「十分」と「かなり」を合わせた数値が70.5%であるのに対し、高知文化は75.1%であり、高知の独特な文化を実感している留学生がいる一方、高知文化に対する理解度が「あまり」という留学生も3名(4.3%)いた。このことから、一般的な日本文化と高知独特の文化との区別が明確についていない学生もいることが見受けられた。

表2 高知文化に対する理解度

	中国	台湾	インドネシア	韓国	モンゴル	パキスタン	豪州	ロシア	ウクライナ	計
十分	9	2	2	1	1	1	0	1	0	17 (24.6%)
かなり	20	6	4	3	0	1	0	0	1	35 (50.7%)
普通	7	2	1	2	1	0	1	0	0	14 (20.3%)
あまり	1	0	2	0	0	0	0	0	0	3 (4.3%)
不十分	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平均	4.0	4.0	3.7	3.8	4.0	4.5	3.0	5.0	4.0	4.00

3.2 日本人・地域住民との交流

留学を通じた日本人学生との交流は、表3の通りである。

日本人学生との交流は個人差があるが、平均4.00と頻度の高い交流が行われていることが分かる。全体的に、日本人学生との交流は、勉強のサポートをしてくれるチューターや語学を互いに教え合うパートナーシップでの活動、サークル活動、学内外のイベントへの参加により推進されている。

表3 日本人学生との交流

	中国	台湾	インドネシア	韓国	モンゴル	パキスタン	豪州	ロシア	ウクライナ	計
十分	7	2	2	2	2	0	1	1	0	16 (22.5%)
かなり	20	6	5	2	0	1	0	0	0	35 (49.3%)
普通	8	2	2	2	0	1	0	0	1	16 (22.5%)
あまり	3	0	0	1	0	0	0	0	0	4 (5.6%)
不十分	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平均	3.8	4.0	4.0	3.7	5.0	3.5	5.0	5.0	3.0	4.00

留学を通じた地域住民との交流は表4の通りである。日本人学生との交流が平均4.00であったのに対し、地域住民との交流は平均3.54であった。留学生が日常的に関わるアルバイト先や留学生の出身国・地域に興味を持っている地元の方々との交流等が主であり、学外のイベントに参加していないと回答した留学生は、地域住民との交流がほとんどないと回答している傾向が強い。そのため、地元住民との交流に関しては、個々人の積極的に交流する姿勢が問われていると言える。また、多くのイベントに積極的に参加している学生のほうが日本語のコミュニケーション能力が高い傾向がうかがえた。これは、日本語を駆使してコミュニケーションが取れるイベントに進んで参加していく姿勢に表れていると言えよう。

表4 地域住民との交流

	中国	台湾	インドネシア	韓国	モンゴル	パキスタン	豪州	ロシア	ウクライナ	計
十分	9	0	1	0	1	0	0	1	0	12 (16.9%)
かなり	10	5	2	4	0	0	0	0	0	21 (29.6%)
普通	14	5	4	3	1	2	1	0	0	31 (43.7%)
あまり	5	0	2	0	0	0	0	0	0	7 (9.9%)
不十分	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平均	3.6	3.5	3.2	3.6	4.0	3.0	3.0	5.0	3.0	3.54

3.3 高知地域の観光文化の改善点

高知地域における観光の改善点として自由に回答してもらったが、最も多かったのが「交通の不便さ」であった。これは、「観光していて困った点」も同様の結果であった。そのため、留学生が高知で観光した場所も高知市内が

中心という結果になった。その反面、高知観光の魅力としては、「自然の豊かさ」や「人の親切さ」を多くの留学生が挙げていた。

「外国人の目線からの高知の観光資源についての提言」については、「乗り放題のチケット等による交通手段の改善」や「外国語表記のある詳細な地図や情報の提示」、「外国語が話せるスタッフの常駐」、「映画やドラマによる高知の宣伝」、「農家体験のイベントの周知」、「高知の酒文化を中心としたイベントによる観光客の誘致」等の意見が挙げられた。

4. 高大連携による交流学習活動

「地域文化・観光体験調査」の結果を踏まえ、「地域課題に関する体験プログラム」の目的としては、1) 外国人留学生が日本人学生や地域住民との触れ合い等を通じて、地域の社会文化、引いては日本の社会文化に対する理解を深める、2) 外国人留学生の目線から、地域の観光資源の開発や少子高齢化等の問題について考え、解決策を提案する、3) 授業で学んだ日本語を地域社会で実践的に活用し、日本語学習に対するモチベーションを高める、の3点が挙げられる。

そして、「地域文化・観光体験調査」や「地域課題に関する体験プログラム」の目的を見据え、高大連携による地域文化体験を通じた交流学習が、2017年6月18日及び2017年11月11日に高知大学の外国人留学生対象の課外研修において行われた。

課外研修は、外国人留学生が日本及び地域の文化・歴史等を学び、理解を深めるとともに、留学生間の親睦・交流を図ることを目的に毎年一回秋期に実施されている事業である。2017年度は、大学から「地域課題に関する体験プログラム」の開発のため「大学機能強化促進経費」の支援を受け、高校生との交流や地域文化体験等地域住民との交流をプログラムの柱として施行的に実施された。これは、留学生が交通が不便なため、市内のみで活動している現状を打破し、地域とのつながりを重視した内容を盛り込んだものである。

以下、2017年度に実施された高大連携による地域文化体験を通じた交流学習について述べていく。

4.1 檮原高等学校との交流学習活動

2017年6月18日に体験型授業「地域文化理解」の開発の一環として、高知大学の朝倉キャンパス⁴⁾日本語クラスの受講生を中心に、四国カルスト見学

及び禰原高等学校生徒との交流が実施された。この事業は、外国人留学生在が地域の文化、歴史等を学び体験し、地域への理解を深めるとともに、地域の高校生との交流さらには留学生間の親睦・交流を図ることを目的としており、留学生26名（中国15名、韓国3名、インドネシア3名、米国2名、スウェーデン・ベトナム・モンゴル各1名）、日本人学生3名が参加した。参加した留学生は、主に共通教育の「日本語Ⅰ」と国際連携推進センターで開講されている日本語総合コースの「アカデミック日本語Ⅰ」を受講している学生であり、日本語レベルは日本語能力試験N3からN1程度でマルチレベルの留学生在が混在していた。また、3名の日本人学生は「アカデミック日本語Ⅰ」で行われているグループワークのサポートとして一学期間を通してボランティアで参加してくれている学生で、日本語教育副専攻の学生である。

以下、高知県の中山間部に位置する禰原町で行われた高大連携による交流学習活動の概要を示す。

実施日時	: 2017年6月18日（日）
参加学生	: 高知大学に在籍している留学生26名・日本人学生3名 (留学生の内訳 中国: 15名、韓国: 3名、インドネシア: 3名、米国: 2名、スウェーデン: 1名、ベトナム: 1名、モンゴル: 1名)
参加生徒	: 禰原高等学校生徒22名
使用言語	: 主に日本語
実施目的	: 外国人留学生在が地域の文化、歴史等を学び体験し、地域への理解を深めるとともに、地域の高校生との交流さらには留学生間の親睦・交流を図る目的
交流内容	: 高校生による禰原町の紹介、グループごとの自己紹介、留学生から高校生へのインタビュー活動、グループ対抗ジェスチャーゲーム、高校生による禰原町ツアーガイド等

今回の交流学習は、禰原高等学校の英語科の教諭から高校生と留学生との交流学習を「禰原観光ツアー」をテーマに、高校生が地元を英語で案内する形で実施したいという申し出により実現したものである。そこで、禰原高等学校における交流学習活動は、「高知大学留学生に英語で禰原観光ツアーを行うことで、語学力やプレゼンテーション能力を伸ばすだけでなく、国際感覚や将来、社会や地域に貢献できる人づくりを行う」ことを目的に実施する予定であった。しかし、今回の交流学習活動に参加した留学生の大半は非英語圏の学生であり、日本語・日本文化の習得を目的として来日した交換留学生在であったため、使用言語は主に日本語で行われた。

大学生の参加者はまず、四国地方の中央に位置する四国カルストの天狗高原にあるカルスト学習館を訪れ、館長からカルストの地形が形成された歴史や四国カルストの特徴等について説明を受けた後、館内の展示資料を見て回った。カルスト学習館観覧後、天狗高原の展望台に行き、展望台から臨む白い石灰岩が点在する景観や巨大な風力発電のプロペラ、牛の放牧等を各自見学した。

その後、四国カルストの麓の禰原町にある高知県立禰原高等学校に赴き、3年生を中心に海外留学や留学生との交流に興味がある高校生22名と大学生29名による交流学習活動が行われた。禰原高等学校では、大学生に手作りの名札が渡され、体育館内に案内され高校生3名による司会で活動が進行していった。まず、体育館でパワーポイントの資料を使用して高校生による禰原町の紹介が日本語で行われた。その後、高校生・大学生ともに2、3名ずつの5、6名で構成された10の小グループに分かれ、グループごとに自己紹介を行いアイスブレイキングをした。そして、グループのメンバーと1対1または1対2になり、大学生から高校生に対してインタビューが行われた。このインタビュー活動は、初対面の高校生との交流を促し、地域事情の理解を深めるための活動であり、事前に配布しておいた「交流ワークシート」に基づき主に日本語で行われた。インタビュー終了後に高校生主導による各グループ対抗のジェスチャーゲームが行われ、各グループの結束が強まるとともに交流が一気に深まった。

最後に1時間ほどかけて、高校生による禰原町のツアーガイドが行われ、禰原町の主要な観光名所である三嶋神社、著名な建築家隈研吾が設計した町役場、ゆすはら座、マルシェ・ユスハラ、掛橋邸等をグループごとに回った。そして、坂本龍馬ら幕末に活躍した志士の銅像がある維新の門で合流して、高校側が用意してくれた飲み物、お菓子等を楽しみながら、さらに交流を深め参加者全員で銅像の前で記念撮影をした。禰原町での高校生との交流は2時間程度であったが、高校生と留学生との距離がかなり縮まり、方方で連絡先を交換し写真を撮りあう姿が見受けられ、互いにまた是非会いたいと名残を惜しむ交流となった。

交流学習終了後、大学生と高校生の両者に紙ベースの「振り返りシート」を提出してもらった。「振り返りシート」の内容は、「交流活動の満足度」、「相手に対する理解度」、「交流の深度」、「地域文化に関する理解度」、「交流活動の感想」等であり、感想以外は、5段階で評価してもらうとともにその理由

を記述してもらった。

4.2 安芸桜ヶ丘高等学校・安芸高等学校との交流学習活動

2017年11月11日に高知県東部の太平洋に面した安芸市にて留学生との交流に関心がある安芸桜ヶ丘高等学校及び安芸高等学校の生徒52名と高知大学留学生57名（中国27名、インドネシア10名、台湾6名、韓国4名、マレーシア・スウェーデン各2名、ベトナム・フィリピン・ネパール・アルゼンチン・エチオピア・ブルキナファソ各1名）による地域文化体験を通じた交流学習を兼ねた課外研修が実施された。参加した留学生は、高知大学の3キャンパス（朝倉・物部・岡豊）で勉学に励む留学生であり、日本語能力は、入門から上級レベルまで混在していた。来日直後の入門レベルの留学生は、日本語では挨拶と簡単な自己紹介ができるのみだったので、英語でのコミュニケーションを主とした。

今回の交流学習は、安芸桜ヶ丘高等学校と安芸高等学校の共催で行われている「国際交流体験を通じたグローバル人材育成事業」の一環として安芸桜ヶ丘高等学校の教諭から「地域の魅力再発見」をテーマに高校生と高知大学の留学生との国際交流を「安芸市のまち歩きや体験学習」をしながら実施したいという申し出により実現したものである。高知大学においても、2017年度は安芸市での課外研修を予定していたため、地元の高校生との交流学習活動を主軸にした体験学習型課外研修が実施された。高校側の今回の交流学習活動の位置づけは、「異なる文化・伝統・生き方を尊重し合うマインドと志向によって行動する人材を育成するためのファーストステップ」であり、目指す成果としては、「①生徒たちのコミュニケーション力を高める、②幅広い視野や柔軟な思考力を養う、③他者との交流を深めるために必要な、語学力・知識・実践力の重要性に気づき、それを高めようと志向する、④他者との交流を通じて、地域の魅力を再発見する」という4点を掲げている。

以下、安芸市で行われた高大連携による交流学習の概要を示す。

実施日時	2017年11月11日（土）
参加学生	高知大学に在籍している留学生57名 （中国：27名、インドネシア：10名、台湾：6名、韓国：4名、マレーシア：2名、スウェーデン：2名、ベトナム：1名、フィリピン：1名、ネパール：1名、アルゼンチン：1名、エチオピア：1名、ブルキナファソ：1名）
参加生徒	安芸桜ヶ丘高等学校生徒16名・安芸高等学校生徒36名
使用言語	日本語・英語
実施目的	外国人留学生が地域の文化、歴史等を学び体験し、地域への理解を深めるとともに、地域の高校生との交流さらには留学生間の親睦・交流を図る目的
交流内容	ちりめんじゃこ天日干し体験・試食、グループごとの自己紹介、高校生による安芸市ツアーガイド、皿絵付け体験、漢字一字による振り返り活動等

大学生・高校生の参加者は最初にちりめんじゃこ加工工場を訪れ、安芸市の名産であるちりめんじゃこが加工されるまでの過程を見学し、実際に天日干し体験をし試食をした。その後、高校生と留学生混成の7、8名ずつの15の小グループに分かれ、簡単な自己紹介をした後、安芸市の観光名所である野良時計や武家屋敷、三菱財閥の創始者である岩崎彌太郎の生家、安芸市出身の作曲家弘田龍太郎の歌碑、野球場、よく通う駄菓子屋等、高校生がグループごとに考えたテーマに沿ったルートでまち歩きを楽しんだ。その後、200余年の歴史と文化を誇る焼き物の里であり、陶芸が楽しめる内原野公園で合流し、グループごとに昼食を取りつつ交流した後、皿絵付け体験を行った。皿絵付け体験では、高校生が同じグループの留学生の母語で一文字入れたり、留学生が故郷を懐かしみ、そのシンボルを描いたり、今回の交流をテーマに絵や文字で表したりし、それぞれが工夫を凝らし個性的な皿が作られた。

引き続き、安芸桜ヶ丘高等学校の教諭が主導し、「安芸市の魅力について考える一出会いと体験を通じた地域の魅力再発見」をテーマにグループワークが実施された。具体的には、安芸市のまち歩きをして見たこと、感じたことを話し合い、どのようなところに安芸市の魅力を感じるかについてそれぞれのグループが漢字一文字で表現するというワークショップが行われた。そして、高校生が中心となり、グループごとに今回の活動で発見した「安芸市の魅力」について漢字一文字とともに、その漢字を選んだ理由が皆の前で発表された。それぞれのグループが選んだ漢字は、「繫」、「情」、「和」、「楽」、「笑」、「爽」、「美」、「麗」等であった。

今回の交流学習活動を通じて、安芸市の歴史的建造物や田舎の田園風景、

海に沈む夕日等を見学するだけでなく、体験学習をしながら安芸市の地元の高校2校の生徒とも親睦・交流を図るとともに、高知大学の他キャンパスに在籍している留学生等普段会わない学生と交流する機会も得られ、有意義な交流となったことがうかがえた。

交流学習終了後、大学生と高校生の両者に紙ベースの「振り返りシート」を記入してもらった。「振り返りシート」の内容は、「交流活動の満足度」、「体験学習の満足度」、「交流の深度」、「地域文化に関する理解度」、「交流活動の感想」等であり、感想以外は、5段階で評価してもらうとともにその理由を記述してもらった。

5. 高大連携による交流学習活動の評価及び考察

2017年度に実施された髙原町と安芸市での高大連携による交流学習活動終了後に大学生と高校生に記述してもらった「振り返りシート」を基に、2つの活動に対する評価を見ていく。

5.1 髙原高等学校生徒との交流学習活動における評価

髙原町での交流学習活動に参加した高校生22名と大学生29名(留学生26名、日本人学生3名)の振り返りシートの結果を表5に示す。評価は、5段階で評価してもらうとともに、その理由を記述してもらった。

表5 髙原高等学校生徒との交流学習活動における評価

NO	振り返りシート内容	高校生	留学生	日本人学生	平均
1	インタビューした相手のことがよく分かったか。	4.6	4.3	3.3	4.1
2	インタビューを通して、うまく交流ができたか。	4.5	4.4	3.7	4.2
3	今回の交流活動で髙原町のことがよく説明できたか/分かったか。	3.9	4.3	3.7	4.0
4	今回の活動を通して、他の生徒/学生との交流が深まったか。	4.1	4.3	5.0	4.5
5	今回の活動の満足度	4.7	4.6	5.0	4.8
平均		4.4	4.4	4.1	4.3

注：設問3は、高校生に対しては「今回の交流活動で髙原町のことがよく説明できたか」、留学生と日本人学生に対しては「今回の交流活動で髙原町のことがよく分かったか」について質問。

設問4は、高校生に対しては「今回の活動を通して、他の生徒との交流が深まったか」、留学生と日本人学生に対しては「今回の活動を通して、他の学生との交流が深まったか」について質問。

5.1.1 檮原高等学校生徒との交流学習活動における振り返りシートの結果及び考察

檮原町での「交流学習活動の満足度」は5段階評価で高校生が4.7、留学生が4.6、日本人学生が5.0で、全体の平均が4.8であり、非常に満足度の高い交流学習活動が展開されたことが分かる。特に、「今回の活動を通じた交流の深度」は、高校生が4.5、留学生が4.4であり、「インタビューをした相手に対する理解度」でも高校生が4.6、留学生が4.3と高評価を博しており、1対1の対面でインタビューをした相手を通して互いに理解し合い交流が推進されたことがうかがえる。日本人学生は「インタビューを通しての交流」が3.7、「インタビューした相手に対する理解度」が3.3であり、高校生との交流についてはそれほど高い評価ではないが、「他の学生との交流」は5.0であり、一日中留学生と行動をともにしたことで留学生との交流が推進されたことが見受けられた。高校生の「他の生徒との交流の深度」が4.1であり、「インタビュー相手の留学生との交流の深度」の4.5と比較して相対的に低いことから、高校生も日本人学生も留学生を中心として交流が深まりを見せたことが分かる。また、留学生においても、「他の留学生との交流の深度」が4.3であるのに対し、「インタビュー相手の高校生との交流」が4.4で若干高いことから、今回のインタビュー活動を通して高校生との交流が深化したことがうかがえた。

また、留学生の「檮原町に関する理解度」は4.3であり、高校生へのインタビューで檮原町での暮らしについて直接情報を得た後、高校生のガイドで小グループによる檮原町の観光が行われたことによる相乗効果が認められた。高校生の「檮原町に関する説明の出来」については3.9との評価であるが、これは自己評価のため謙遜の気持ちが働いたことに加え、自分の町や生活について他の人に説明することの困難さや明確に相手に伝わったのかが定かでなかったのが影響したと考えられる。

5.1.2 檮原高等学校生徒との交流学習活動における振り返りシートの高校生の感想及び考察

「インタビューをした相手に対する理解度」についての高校生の感想は、肯定的な意見がほとんどで、「1対1での質問タイムだったので、相手の人から質問されたことを相手の人にも聞くことができたし、聞いてみたかったことも聞けた」、「会話を多くできたし、聞き取りやすかった」、「日本語が上手で、想像以上に会話ができた」、「質問だけではなくて、お互いのこともたくさん話した」、「質問に私が答えた後に、それについて留学生も答えてくれた

し、2人で深く話げできた」、「相手の日本語はとても流暢で、聞き取りやすかつた。質問した時もきちんと答えてくれた」、「質問を少し変えて話げできた。趣味について話したりできた」、「私に質問しながら自分のことも話してくれた」、「分からない言葉も諦めず、最後まで突き詰めることまでしてくれて、答えている私もうれしくなつた」、「私のことを深く聞いてくれ、また、向こうもたくさん自分のことを教えてくれた」という感想が挙がつた。否定的な意見は、「自分があまり質問をしなかつた」、「あまり積極的に話げできなかつた」という2名の生徒の感想のみであつた。このように、インタビューした相手と互いに質問をしあいつつ、相互に理解が深まつた様子うかがえた。

「インタビューを通しての交流」に関する高校生の感想は、「時間内に話し終わつたが、その後もいろいろな話をするこゝができた」、「留学生の国のことも知れたし、みんな日本語が上手くコミュニケーションが取れたし、一緒に写真を撮つたりした」、「日本人のようにごく普通の会話げできた」、「自分から積極的に話しかけられた」、「相手が積極的だつた」、「インタビューで相手の国の流行を知つていたので、話げ盛りが上がつた」、「詳しく話すこゝができて、共通の好きな曲を見つげたりするこゝができた」、「留学生が聞きたいことと私が聞きたいことをそれぞれ確認し、交流しあうこゝができた。そして、初めからずっと笑顔で話し合せて良かつた」、「質問の内容が具体的で答えやすかつた。あと話げ広げやすかつた」、「グループが一緒にの人と皆分け隔てなくしゃべれた。留学生の日本語がすばらしかつたので、たくさん話げできた」、「日本語がとても上手だつたので、英語の会話げ難しくなると日本語で話せたのでコミュニケーションがよく取れた」、という肯定的な感想と「あまり話げできなかつた」という否定的な感想が1名あつた。以上のように、インタビュー終了後も話げ尽きなかつた様子や互いの共通点を見つげ話に花が咲いた様子、英語でインタビューに挑戦し日本語でフォローしてもらつた様子等全体を通して笑顔が絶えない交流になつたこゝが見受けられた。

「梶原町に関する説明の出来」に関する高校生の感想は、肯定的なものとしては「自分の知識をきちんと教えてあげることができた」、「雑談しながら、梶原のことをたくさん紹介できた」、「メモを取ってくれる人もいたので、もっと紹介したいなと思えた」、「案内はできたが、良さが伝わつたかは分からない。でも喜んでくれて嬉しかつた」、「班の皆さんと町内を巡り、ツアーを楽しむこゝができた。いつも通つている道だけど、新鮮な道のように感じた」、

「他の国の人に自分の地域の魅力を伝えることで、どこがいいのか見直すことができた」という感想が挙げられた。否定的な感想としては、「いろいろなスポットについて自分の言葉で説明しようと努力できた。でも実際は完璧には説明できず、自分の町のことをしっかり知っておこうと思った」、「もっといろいろなところを知ってもらいたかった。時間が短かった」、「六志士のことや維新の門などについての知識が足りなかった、時間内にゴールに到着できなかったなどの課題がある」という意見があった。高校生は、梶原町のガイドを留学生にしなが、自分の町の良さを再確認するとともに、説明の困難さ、知識不足を認識している様子が見えがえる。また、観光ツアーの時間が足りず予定した全てのスポットを廻ることができなかったグループもあったほど紹介したかった場所が多かったという高校生の真摯な態度が見受けられた。

「今回の活動を通じた他の生徒との交流の深度」に対する高校生の感想では、「グループ活動だったので、同じグループの上級生との交流が深まった」、「ゲームでグループの人と話したし、説明するときもしっかり話を聞いてくれ、他学年の人とも交流することができた」、「普段話さない人とも留学生を通して話すことができたので、自分のコミュニケーション力が高まったかなと思った」、「準備の時間から一緒に活動できた仲間と毎日残って作業していた。当日早く来てくれたみんなも一緒に作業してくれて助かった。みんなも対応を受け入れてくれて、楽しくやってくれて嬉しかった」という肯定的な意見があった一方、「いろいろ話せたけど、留学生と話すことが多かったので、あまり話していない」、「すでに仲の良い子だったから、特に深まったりはしていない」という感想があった。グループでの活動により同じグループのメンバーと留学生を通して交流が深まったり、交流学习を準備する作業の中で仲間との絆が深まっていったことが分かる。

「今回の交流学习活動を通して学んだこと」についての高校生の感想は、「コミュニケーションの楽しさ」や「貴重な経験」、「自文化に対する気づき」、「内省」、「意欲」の5点が挙げられた。「コミュニケーションの楽しさ」に関する感想は、「外国人とでも、通じ合う言葉があれば楽しかった」、「高校生はみんな緊張していたが、留学生の方々は積極的に話をしてくれて、コミュニケーションを取ることの大切さ、楽しさを知ることができた」との意見が挙げられた。「貴重な経験」については、「たくさんの国とたくさんの人のいろいろなことが知れたのでとても楽しかった。もっといろいろな国のことが知り

たい」、「日本語を話す外国人とこのような交流をしたことがなかったので、すごくいい経験になった」との感想があった。「自文化に対する気づき」に対しては、「自分たちが普段使っている言葉でも、向こうの人からしたら分からない言葉もあって勉強になった」、「日本と相手の国との共通点や禰原のいいところを教えてくれた」、「見慣れている禰原の景色も外国の人からしたら美しいということ」という気づきが見られた。「内省」については、「外国の人たちに分かりやすい日本語で話すのは難しいと思った」、「あまり他国の人と交流することが無かったので、どのような日本語が難しいのか分かって将来役に立つかなと思った」、「交流を通して、日本語をどう伝えたら理解してくれるか広い視野で考えることができた」、「笑顔で話すこと、ジェスチャーがあるといい」等の反省が挙がっていた。「意欲」には、「自分も英語でコミュニケーションが取れるようになりたいと思った」、「まだまだ自分のスピーキング力は低いので、これからは積極的にALTの先生と話をする機会を増やしていきたいと思った」、「勉強を頑張れば、ほかの国の人と話することができる」という感想があった。その他、「高知大の学生さんはたくさんの留学生一人ずつに話しかけていて、留学生の方との信頼関係があるんだなと思った」という日本人学生への憧憬等も見られた。このように、高校生にとって今回の交流学習活動は、異文化理解や自文化への気づきを通して将来への意欲につながる貴重な体験であったと言える。

5.1.3 禰原高等学校生徒との交流学習活動における振り返りシートの大学生の感想及び考察

「インタビューをした相手に対する理解度」についての留学生の感想は、肯定的な意見としては「相手が優しいから、私の分からないところを詳しく説明してくれた」、「相手が外国人のことに興味があった」、「非常におとなしい子だったが、よく質問してお互いによく答えた」、「私のインタビューした人は英語が上手だったから、英語と日本語を半々使っていた」、「よく話し合いができ、お互いの好みも分かった」、「インタビューした相手は明るく、熱心な子ですから、インタビューは楽しかった」というものであった。否定的な意見は、「時間制限があったから深く聞くことができなかった」、「ある単語がよく分からなかった。例えば、地名や特別な建物の単語」という2名の学生の感想があった。日本人学生の感想としては、「質問タイムでより理解が深まった」という感想の一方、「相手が他人に興味がないと、一言二言で会話

が途切れてしまう」という感想があった。全体的には、肯定的な感想が大部分で高校生同様、インタビューした相手と互いに日本語や英語で質問をしあいつつ、相互に個人的なことを聞きあい理解が深まっていった様子が分かった。

「インタビューを通しての交流」に関する留学生の肯定的な感想は、「地元のことを聞いて、いろいろ話した」、「ユーモアのある会話をした」、「日本の高校生の考え方を聞いて、お互いに勉強になった」、「自分の高校時代を思い出し、共感できた」、「高校生は分かりやすい日本語で話したから、言ったことは全部分かった」、「お互いのことを話し合い、理解できた」、「少し分からないとき、友達が説明してくれたから、相手との交流がよくできた」、「上手く交流できた。『日本語ぺらぺらね』と言われた」、「LINEを交換した」というものが挙がった。一方、否定的なものは、「自分の日本語が不十分だ」、「自分の日本語は本当に上手くないと思う。また、共通のトピックが多くなかった」、「おそらく上手く交流ができたが、最後まで何を聞いているのかよく分からなかった」という3名の留学生の感想があった。以上のように、インタビューシートに基づき、高校生活や髙原町の自慢できるもの・魅力、自分が考えた質問等を聞きあい、時に友達の力を借りながら双方向の交流を行い、自分の日本語力を見直す良い機会になったことがうかがえる。また、LINE等の連絡先を交換しあい、個人的な交流を深めている様子が見受けられた。日本人学生の感想としては、「お互い情報提供でき、良い交流になった」、「インタビュー以外でも留学生と高校生が上手く交流できるようできるだけサポートした」、「外国人と言語の壁があるのか、上手く高校生が話せていなかった気がする。もっとアイスブレイキングを多く取り入れると良かったかも」という意見もあった。

「髙原町に関する理解度」に関する留学生の感想は、肯定的なものとしては「PPTを作って簡単に説明してくれた。そして、髙原町内の有名な建物を見学した」、「高校生たちがガイドしてくれた上、髙原町の伝統的な建物について話してくれた」、「当地の有名なところを遊覧した。街の雰囲気も体験した」、「分からなかったとき質問した。そして、簡単な単語で説明してくれた」、「高校生が髙原町のことが本当に好きなことがよく分かった」、「ゆっくり、楽しそうに説明してくれた」、「交流で髙原町の文化、食べ物などが分かった」、「歴史観と文化観の満ちた町だということが分かった」、「みんなはワクワクした」という感想が挙がった。否定的な感想としては、「限りのある交流時間

では禰原町のことがよく分からない。もう少し時間がほしい」、「時間が短いのが残念だった」という意見が挙がった。日本人学生は、「高校生がプレゼンを行ってくれ、町案内をしてくれたおかげでよく理解できた」、「神楽のことは知らなかったので、高校生からお話の内容等教えてもらうことができ、本当に良かった」という肯定的な意見がある一方、「有名なものは分かったが、何のためのものなのか、なぜ有名なのかなど詳しくは分からなかった」という否定的な意見があった。このように、高校生が禰原町の紹介のプレゼンをした上で、インタビュー活動で禰原町で案内したいところを個別に紹介し、実際に禰原町をガイドするという一連の流れにより、大学生が禰原町の歴史や文化を味わうことができたと言える。課題としては、観光案内の時間が不十分だったこと、高校生のより詳細な説明が挙げられる。

「今回の活動を通じた他の学生との交流の深度」に対する留学生の感想は、「グループに分かれて活動を行うので、普段会っていない留学生とも交流することができた」、「一緒に禰原町を理解し、一緒にゲームをし交流が深まった」、「前に話したことがなかった留学生と同じグループになったため、いろいろ話して仲良くなった」、「バスに乗っている間やご飯を食べているとき、他の留学生とたくさん話した」、「今回の活動を通して、新しい友達ができたととても楽しかった」という肯定的な意見がほとんどであった一方、「同国の留学生との交流は深まったが、他の学生とはそれほどでもなかったので、次回頑張る」、「時間が少ない」という感想があった。日本人学生も「新しい留学生の友達がたくさんできた」、「友人が増えた。全員と話すことができなかったが、とても楽しむことができた」、「話をする機会がなく、留学生と関わりがなかったが、今回をきっかけに仲良くなれとても嬉しく思う」という感想であった。今回の交流学習活動が良い機会となり、話したことがなかった学生とも同じグループのメンバーとして行動することで、親しくなっていたことがうかがえる。

「今回の交流学習活動を通して学んだこと」についての留学生の感想は、「コミュニケーションの楽しさ」や「インタビューからの学び」、「自文化との違いの発見」、「内省」、「地域の魅力発見」の5点が挙げられた。「コミュニケーションの楽しさ」に関する感想は、「高校生が案内してくれるのは面白かった。大人がいないとき、高校生が少し勇気を持ちコミュニケーションを取るようになるから、それが経験できて良かった」、「ガイドしてくれた生徒たちがすごく楽しくて面白かった。なぜなら、建物の歴史を詳しく話してくれたから

だ。さらに、分からないとき、非常に頑張ってくれて英語で話してくれた。今回も日本人の国民性、計画性の強さも感じた」、「高校生と一緒に話すのが楽しかった。禰原町の高校生活について知った」との意見が挙がった。「インタビューからの学び」については、「インタビューを通じて、禰原町のことが少し理解できた。生活に不便なところがたくさんあるが、みんながこの町を愛している」、「インタビューをして禰原の魅力と現存する問題が分かり、禰原が活気がある理由を知った。本当に最高のインタビューで勉強になった」との感想があった。「自文化との違いの発見」に対しては、「交流を通して、中国と日本の高校生活の違いが分かった。どちらも大変ですが、頑張っている大学へ行けるよう勉強してほしい」、「高校生は皆親切で、至るところ一つ一つ紹介してくれた。知らないものも分かりやすい日本語で紹介してくれた。町で会った知らない人もお互いに挨拶していて、びっくりした。私たちを案内するために、いろいろな準備をしてくれ私は感動した」、「初めて神社に行って、参拝するルールを学んだ」という気づきが見られた。「内省」については、「禰原町に来る前は坂本龍馬の足跡は高知市のみにあると思い込んでいた。脱藩ルートというものの存在も知らなかった。自分の無知さに恥ずかしい感じがする」、「高校生と交流してから、皆が禰原町を元気にするために、力を尽くしたい気持ちがよく分かった。すごいと思った。禰原町の人には自給自足の生活をしている。私もこのような生活をしたい」等の振り返りが挙がっていた。「地域の魅力発見」は、「高校生が私たちを連れて禰原町のいろいろなところを案内した。伝統的な建築物、古い神社で日本の文化を体験することができた。当地の住民たちが外国人を見て微笑みながら『こんにちは』と声をかけてくれたのは温かさを感じた」、「禰原での学校生活は不便なところもある。運動場が遠くて運動するときは大変だと思う。でも、みんなは禰原町の発展のため一生懸命頑張っていることにすごく感動した」、「交流相手は質問に親切に答えてくれた以外にも禰原町のこともいろいろ教えてくれた。若いうちは外に出て働きたいが、年を取ったら故郷に帰りたいということからみると、禰原町は実に生活しやすい魅力的な町だ」等の感想があった。そして、「高知は自然が多くきれいに残っている中で、交通の便の悪さや言語面のサポート不足等が外国人観光客を何となく遠ざけてしまっているのではないか」という観光振興に関する問題点の改善策を挙げる者もいた。日本人学生からは、「実際に住んでいる高校生から禰原の案内をしてもらおうと、細かなところまで教えてもらえるのでとても良かった。留学生も『ここはのどかでロマン

ティックだね』と日本らしい町並みと風景を楽しんでいた」、「自然が多く、過疎を感じる部分もあったが、何よりも地域の人たちの温かさを感じた。地域の自然や伝統を大事にしながら子供たちを笑顔で見守る檜原の人たちは『温かい』という言葉がピッタリだと思った」と地域の魅力を感じたり、「高校生は積極的に話しかけてくれて、留学生との距離がすぐに縮まっていた。時間との戦いの中、臨機応変にガイドを全うしてくれ、とても楽しむことができた」という学びを得たりしていた。また、「普段からALTを交えながらの授業やイベントを行っているからか、市内の高校生に比べ外国人に対する抵抗感が少なかったように思う。留学生も高校生も楽しそうで良かった」、「私たちのためにレジュメやスライド、アイスブレイクなど考えてくれ嬉しく思った。留学生が楽しそうに笑っていたので大成功だった」、「高校生は緊張して話す人と話さない人の差が大きかった。もっと自分たちについてたくさん話しても良かったと思う。人数が少ない分、もっと深く、継続的に活動、交流を続けていけると思う」という感想が挙げられた。以上のように、大学生にとっても今回の交流学习活動は、インタビュー活動やグループワークによりコミュニケーションの楽しさを学ぶとともに、自文化との違いの発見や内省が促され、地域文化を理解し、その魅力について気づきが得られる有意義な体験となったと言える。さらに、このような交流活動を定期的に継続して実施することで双方の学びが深まると考えられる。

なお、『四国カルスト見学』と『檜原高校生との交流』、『檜原高校生による檜原町ツアーガイド』の中で、どれが一番良かったかとの質問に対して、「四国カルスト見学」が13名、「檜原高校生との交流」が7名、「檜原高校生によるツアーガイド」が9名であり、大学生にとって檜原の綺麗な景色だけでなく、高校生との交流学习が深い印象を残したことが読み取れた。

5.2 安芸桜ヶ丘・安芸高等学校生徒との交流学习活動における評価

安芸市での交流学习活動に参加した高校生52名中46名（回答率88.5%）と留学生57名（回答率100%）の振り返りシートの結果を表6に示す。評価は、5段階で評価してもらうとともに、その理由を記述してもらった。

表6 安芸桜ヶ丘・安芸高等学校生徒との交流学習活動における評価

NO	振り返りシート内容	高校生	留学生	平均
1	グループ活動を通して、うまく交流ができたか。	4.3	4.2	4.3
2	今回の交流活動で安芸市のことがよく説明できたか/分かったか。	4.1	4.1	4.1
3	皿絵付け体験の満足度	4.0	4.6	4.3
4	今回の活動を通して、他の生徒/学生との交流が深まったか。	4.6	4.2	4.4
5	今回の活動の満足度	4.7	4.7	4.7
平均		4.3	4.3	4.4

注：設問2は、高校生に対しては「今回の交流活動で安芸市のことがよく説明できたか」、留学生に対しては「今回の交流活動で安芸市のことがよく分かったか」について質問。

設問4は、高校生に対しては「今回の活動を通して、他の生徒との交流が深まったか」、留学生に対しては「今回の活動を通して、他の学生との交流が深まったか」について質問。

5.2.1 安芸桜ヶ丘・安芸高等学校生徒との交流学習活動における振り返りシートの結果及び考察

安芸市での「交流学習活動の満足度」は5段階評価で高校生・留学生ともに4.7であり、非常に満足度の高い交流学習活動が展開されたことがうかがえる。しかし、高校生と留学生との交流に焦点を当ててみると、「グループ活動を通じた交流の深度」は、高校生が4.3、留学生が4.2で小グループのメンバーとの交流が促進された感はあるが、高校生の「他の生徒との交流の深度」が4.6、留学生の「他の学生との交流の深度」が4.2であることから、留学生は高校生と他の留学生の両者ともに交流している一方、高校生は他の高校生との交流が留学生との交流と比較し密度が濃かった可能性が高いことが推察される。

また、高校生の「安芸市に関する説明の出来」が4.1で、留学生の「安芸市に関する理解度」も4.1であったので、高校生が自分たちが決めたテーマの下、その解説をしながら小グループで安芸市の観光ガイドを十二分に準備し臨んでくれ、留学生も安芸市についての理解が促進されたことが見受けられた。さらに、体験学習として小グループ単位で臨んだ「皿絵付け体験」は高校生が4.0、留学生が4.6と高い評価を博しており、新鮮な体験を通して高校生と留学生の交流が深まりを見せたことがうかがえた。

5.2.2 安芸桜ヶ丘・安芸高等学校生徒との交流学习活動における高校生の振り返りシート感想及び考察

「グループ活動を通じた交流の深度」についての高校生の感想は、肯定的な意見として「積極的にコミュニケーションを取り、いろいろな会話ができた」、「初めから話が絶えず一人一人が十分に交流・会話ができた」、「好きなもの、したいことなど日常生活で話すようなことを話せた」、「楽しく会話もできたし、みんなが笑顔でいられたので良かった」、「留学生が日本語が話せたから、交流しやすかった」、「まあまあしゃべれたが、質問されたときに答えられないときがあった」、「最初は話せなかったが、共通の趣味が自己紹介で分かったので話せた」、「英語での交流はもちろんのこと、日本語を教えたり、文化の違いなどを共有したりすることができた。母国に来たときに連絡ができるようにと連絡先の交換もした」、「スムーズな英会話ではできなかったが、身振り手振りで何とかあった」、「自分から話しかけることができた。日本語の説明などができた」、「言葉が分からず手間取ったこともあったが、コミュニケーションが取れた」、「時間が経つにつれて仲良くなれ、お互いのことや国に理解を深め交流できた」というものがあった。否定的な意見としては、「緊張して話せなかった」、「留学生に話しかけることができなかった」、「グループの留学生全員と話せなかった」、「英語で上手に表現できなかった」、「お互いに理解できず微妙な空気になったときがあった」、「会話をしているだけでも通じないときがあった」、「コミュニケーションはあまり取れなかったが、言いたいことを伝えることができた」という感想があった。このように、高校生は留学生が日本語が話せる場合、比較的スムーズに交流ができたが、英語でコミュニケーションを取らなければならない場合、積極的に話しかけることができなかつたり、伝達のみで会話のやり取りに苦労したりしている様子が見えられた。しかし、共通の趣味が見つかったり、易しい日本語で説明したり、身振り手振りを交えて交流することで、心が通じ合える経験が共有できたと思われる。

「安芸市に関する説明の出来」に関する高校生の感想は、肯定的なものとしては「ポイントで詳しく説明をして、安芸の歴史について知ってもらえた」、「決めたルートを守って説明しながら歩けた」、「紹介する場所以外にもたくさん紹介できた」、「主に歴史について知ってほしくて、事前に調べておいた場所を回って、昔の伝統を今でも受け継いでいる心に感動したと言ってもらえたので、安芸市について詳しく伝えられた」、「安芸の伝統的なものや観光

地を知ってもらえた」、「事前に調べておいたことが質問されたときに役立った」、「あまり気にしていなかったことを留学生に教えるためにいろいろ見て回ると、いままでに気付かなかった建物などがあり新しい発見がたくさん見つかり、またそのため案内がスムーズにできるようになった」、「紹介したところに興味を持ってもらえて、それについての質問もしてもらえた」という感想が挙がった。否定的な感想としては、「安芸市の有名な人物について詳しく説明できたが、町について詳しく説明できなかった」、「友達は頑張っていたが、友達に任せてしまった」、「有名なところを全部紹介できなかった。よく分からない教会を案内した」、「回る効率が悪く他の班より遅れてしまった」、「安芸市のことについて自分が知らなかったので、自信を持って案内できなかった」、「準備していたことは良かったが、それ以外のことも留学生に聞かれて曖昧な応え方をしてしまった」、「上手く英語が話せなかった」、「留学生は全員日本語を勉強していたため会話はできたが、自分たちが言葉を上手くまとめることができなかった」、「距離が遠くて全部を紹介できなかった」、「時間が足らず案内できなかった場所があった」、「少し時間が足りなかった」という意見があった。このように、高校生は事前に安芸市の何を留学生に紹介するのかをグループごとに相談し、ルートを決めてガイドの内容も詳細に準備していた様子が分かる。また、観光ルートの準備をしていく中で、自分たちの住み慣れた町にも新たな魅力があることを発見している。実際に、安芸市を歩きながら留学生に説明を試みるが、全て効率よく案内できなかったり、想定外の質問に戸惑ったり、友達に頼ってしまい自ら紹介ができなかったりというハプニングを経験している様子がうかがえた。まち歩きの距離や時間配分の問題は物理的な問題であり、今後検討していく必要がある。

「内原野陶芸館での絵付け体験」に対する高校生の感想は、「自分のお気に入りのお皿ができて嬉しかった」、「少し難しかったが、個性あふれる皿ができた」、「普段できない体験でとても楽しかった」、「お互いの出来栄を見せあって楽しむことができた」、「絵を通して留学生と交流が深まった」、「初めての経験で楽しかった。留学生と一緒にやることによって柄の話をしながらかれたので楽しかった」、「留学生たちと写真を撮りながら楽しんで体験できた」、「同じグループの韓国人の方に、韓国語で自分の名前を覚えてもらって書けた」という肯定的な意見が挙がった。一方、「絵が上手く描けなかった」、「美術が苦手であまりやりたくなかった」、「色が一色しかなかったので、もう一色ほしかった」、「一色に限らず二色、三色と構えてもらえたら、もっと表

現力が飛躍し、デザインの幅も広がったのかなと思う」、「デザインをよく考えたかったので、もう少し時間がほしかった」という否定的な意見があった。このように、高校生は皿絵付け体験を通して、グループごとに皿の出来栄を見せあいつつ文化の違いを認識したり、留学生から母語の文字を教してもらったりしながら相互に交流が深まっていった様子が見受けられた。

「今回の活動を通じた他の生徒との交流の深度」に対する高校生の感想としては、「同じチームの他校のあまり知らなかった生徒と安芸市についての話で盛り上がった」、「グループ内では深く交流ができ、仲良くなれた。他のグループとの交流はほとんどなかった」、「留学生とはもちろん、他校の生徒とも会えて良かった」、「留学生と話すためにいろいろ話し合えた」、「留学生にどのように紹介するか、いろいろ相談ができた」、「いろいろな交流の経験を通してコミュニケーションが取れた」、「同じ学校の生徒とは楽しんで活動ができた」、「全員で協力して上手く伝えようと努力できた」、「自分の部活のことや相手についても話せた」、「普段あまり話せなかった生徒とも楽しく話せた」、「外国の方と話すのが恥ずかしいもあり、緊張もしていたので少し生徒と話すことがあった」という肯定的な意見があった。その一方、「同じグループではない他校の生徒と話す機会があまりなかった」、「仲の良いメンバーと一緒にずっと行動していて、他の生徒とはあまり関わる機会がなかった」、「少しはしゃべったが、しゃべらない人もいた」、「自分たち以外のグループと関わらなかった」、「もともと仲が良かった」、「留学生が自分たちにたくさん話してくれた」という感想があった。今回の交流学习活動では、グループ内での交流がかなり促進され、同じグループであれば留学生、他校の生徒とも分け隔てなく交流が推進されていったことが分かるが、一部の生徒は同じ学校の生徒や以前から仲が良かったメンバーのみと行動し、他の生徒とは交流が行われなかったことがうかがえる。また、同じグループの生徒同士とは、留学生への観光ルートの紹介や説明に対する相談のため、交流が促されたことが見受けられた。しかし、消極的な学生や語学が得意ではない学生は留学生との交流にためらいの気持ちがあり、生徒同士の交流をせざるを得なかったという状況もうかがえた。

「今回の交流学习活動を通して学んだこと」についての高校生の感想は、「コミュニケーションの楽しさ」や「貴重な経験」、「自文化に対する気づき」、「内省」、「意欲」、「地域の魅力発見」の6点が挙げられた。「コミュニケーションの楽しさ」に関する感想は、「言葉は違っていても積極的にコミュニケー

ションを取ろうとすればお互い通じ合えることが分かった」、「きれいな英語にしなくても、単語をつなげるだけでも通じることが分かった」、「生の英語を聞くことで発音がよくなったような気がする」、「自分の英語がどれだけ通じるのか理解でき、この英語は日常で使えるなどの発見があった」との意見が挙がった。「貴重な経験」については、「留学生と話すことや安芸市の紹介など貴重な経験ができた」、「他の国の人たちに対するイメージが良い意味で変わり、とても有意義な時間になった」、「留学生と十分に交流することができ、また、安芸市のことを再び考えるいい経験になった」との感想があった。「自文化に対する気づき」に対しては、「自分は分かっている、誰かに分かってもらえるように説明するのが難しかった」、「外国の方と会話するのは感じ方などの違いから難しそうだと思っていた。実際、難しかったのだが、お互いに理解しようとしながら留学生の方々と会話できて楽しかった。日本は狭いなあと感じて外国に興味をわいた」、「外国人の見方、感じ方が日本人と違い、気温や景色など生活の違いを実感できた」、「自分の町を英語で紹介するのはとても難しかった。互いの国の文化を教え合うことができ、もっと他の文化について興味をわいた」、「意外な日本に対してのイメージなどがあり、とても面白かった」という外国の文化と比較して自国の文化への気づきが得られた。「内省」については、「もう少しきちんと準備したかった」、「自分の町の紹介が意外に難しく、もっと詳しくなっておかないといけないと思った」、「きちんと交流に参加し、話す能力をあげないといけないと思った」、「コミュニケーションがよく取れなかったし、今の自分の英語力の低さを痛感した」等の反省が挙がっていた。「意欲」については、「自分はあまり積極的に話しかけられなかった、次に機会があれば積極的に話しかけたい」、「自分の将来のためにも他の国の言葉を話すのはやはり難しいとことだと思ったので、しっかり勉強したい」、「留学生は皆明るく話しかけてきてくれるので、それに応えられるようにならないといけない」、「まだまだ私も知らない安芸市のことがあったので、それをもっと多くの人に知ってもらいたい」、「安芸について学べた。これからも、良さを広げていけたらいい」という将来に向けての目標が語られた。「地域の魅力発見」については、「安芸は探せば探すほど良いところが見つかるので、とても楽しかった」、「自分の知らない安芸市の風景を歩いてみることで知ることができたし、歴史も学ぶことができた」、「紹介しながら安芸市は自然や歴史的なことが多いと思った。北の方へ歩いていくと、どこを見回しても山、山、山だった。留学生から地元の

人が優しいという意見が出て、嬉しかった」、「思わぬところで留学生が写真を撮っていて安芸の魅力に気づけた」、「普段何気なく見ている景色が留学生にとって興味深いものがあったりして面白かった」、「自分がここは紹介するところではないと思っている有名でない場所でも、留学生たちの質問のおかげで魅力的だということが分かった」という感想が挙がった。以上のように、高校生にとって今回の交流学习活動は、留学生との交流を通じてコミュニケーションの楽しさや自文化への気づきが得られ、内省をするとともに将来に向けての意欲につながる貴重な体験となったと言える。また、留学生の価値観を通して地域文化に対する魅力を再発見する機会となり、自分の町への自信や誇りが認識され、地域が活気あふれる場所となるような活動に今後つながることが期待できる。

5.2.3 安芸桜ヶ丘・安芸高等学校生徒との交流学习活動における留学生の振り返りシートのご感想及び考察

「グループ活動を通じた交流の深度」についての留学生の感想は、肯定的な意見として「高校生と将来のこと、文化の違い、趣味について共有できてよかった」、「高校生と日本語で会話することができて、楽しく勉強できた」、「高校生はフレンドリーで写真を一緒に撮ったり、絵付けをしたり、まち歩きなど面白くて楽しく交流ができた」、「日本語をあまり話せない自分たちに対し高校生は一生懸命親切に英語でいろいろ教えてくれて、理解できた」、「高校生は英語がとても上手で親切でコミュニケーションが取りやすかった」、「コミュニケーションは取れていたが、英単語が分からず何度かそれが難しかったときもあった」、「お互い理解できないときはインターネットで調べた」、「まち歩きをしながら日常生活や地域のいろいろな話を聞いた。そして、自分も来日後に感じた珍しかったことについて話し上手く交流できた」、「高校生が一生懸命コミュニケーションを取ろうとしてくれたのでうまく交流を図ることができた」、「分かりやすい日本語で話してくれた」、「日本語はあまり話せないが、交流する努力はした」というものがあった。否定的な意見としては、「高校生はシャイで話しかけづらそうだったし、自分たちも努力して話さなかった」、「高校生はシャイでコミュニケーションを取るのが難しかった」、「お互い慣れるのに時間がかかったが、最後には仲良くなった」、「この研修はとても良かったが、グループ活動は普通であった。理由は自分のグループの高校生は会話に積極的ではなかった。先生は友達と話すより我々と

話すことを指導してほしいかった」、「お互い日本語と英語でコミュニケーションを取るのが難しかった」という感想があった。このように、留学生は英語や日本語を活用し、理解できない際はインターネットを使用しながら互いに交流を深めていった様子が分かる。しかし、安芸市での交流活動では、自己紹介やアイスブレイキングの時間を十分に取らないままグループごとにまち歩きが始まったので、積極的に交流するムードメーカーがいる場合は交流が促された一方、お互いに打ち解けあえないままコミュニケーションを取るのが困難なグループもあったことがうかがえる。

「高校生のツアーガイドによる安芸市に関する理解度」についての留学生の感想は、肯定的なものとしては「高校生は実際に歩いて、その場所について詳しく、分かりやすく教えてくれたのでよく分かった」、「高校生は安芸城、野良時計、じゃこの加工工程、安芸の歴史などいろいろな情報を分かりやすく説明してくれた」、「いろいろな歴史的な場所や自然がきれいな場所などに行き、安芸市の魅力的な場所を知ることができた」、「時間が足りなかったが、高校生がしっかり紹介してくれた」、「安芸市の有名な場所を紹介してくれた。安芸市は歴史のあるとても平穏で美しい場所で、友達とまた来たい」、「歩いて自分の目で見て説明を受けたので、とても分かりやすかった」、「高校生はよく調べてくれていたので、よく理解できた」、「彼らが知らない歴史もあったが、説明は分かりやすかった」というものが挙がった。否定的な感想としては、「安芸市を知るには時間が足りなかったが、訪れた場所の印象は残った。次回はもっと時間をかけて回りたい」、「その場を見るだけで、もっとその場所の歴史や名前の由来などの説明がほしいかった」、「ガイドは分かりやすく良かったが、距離が長く時間が足りなかった」、「他のことについて話しすぎて説明は聞いていたが、そんなに記憶に残らなかった」、「安芸市のいろいろな場所を訪れたが、日本語力がないため、生徒の説明で理解するのは難しかった」、「時間がとてもタイトで、細かく見て回る時間がなかった」という意見が挙がった。以上のように、高校生が事前に安芸市を留学生にどのように案内し紹介しようかをグループごとに考案し、準備して臨んだため、実際にまち歩きをしながら安芸市の歴史や自然等魅力が発見できた様子がうかがえた。しかし、一部の留学生にとっては言葉の壁の問題もあり、より詳細な説明を希望していた。さらに、まち歩きをする距離や時間配分については課題が残ったことが分かった。

「内原野陶芸館での絵付け体験」に対する留学生の感想は、「初めて絵付け

体験をしてとても楽しかった。焼き上がりが楽しみ」、「日本の絵付け方法を学べて楽しかった」、「絵を描くのは苦手だが、楽しかった」、「自分の描きたいものを描くことができ、とても満足」、「皆と一緒に体験して各々の絵のセンスを見てその違いを発見でき、とても楽しかった」、「絵付けは自分からしようとするのではないので、その機会を与えてくれたことに感謝する」、「みんなで相談しながら絵を描けて、初めての体験だったので面白かった」、「英語でも説明してくれたのが良かった」という肯定的な意見が挙がった。一方、「絵を描くだけでなく他の行程もやりたかった」、「次回はもっとペイントする色のバラエティーを増やしてほしい」、「間違えすぎて一度綺麗にしたかったので、消しゴムがほしかった」、「椅子に座ってやりたかった」という否定的な意見があった。このように、概ね留学生はグループごとに話し合いながら和気藹々で行った絵付け体験に満足し、より高度な課程に挑戦したがっている様子が見受けられた。

「今回の活動を通じた他の留学生との交流の深度」に対する留学生の感想は、「他の留学生、特に同じグループの留学生とまち歩きをしながら交流を深めることができた」、「同じグループの他国の留学生と仲良くなれた」、「普段あまり話さない留学生と話すことができて交流が深まった」、「バスの車中など他のキャンパスの留学生とも話げた」、「特にランチの時間に、他の留学生とたくさん話すことができた」、「この課外研修で初めて他の留学生と交流を持つことができた」、「一緒にいる時間が多くてたくさん話せた」、「各国の文化について話したりして交流できて、とても楽しかった」、「高校生が話さない分、他の留学生と話していた」という肯定的な意見があった。その一方、「決められたグループと歩くだけで、留学生も自分と同じ国だったので、他の留学生とはあまり交流できなかった」、「自分のいたグループ以外の留学生との交流するには時間が足らなかった」、「中国人だけのグループで、中国語で話して日本語を話さず残念だった」、「グループが決められており、また自分はとてもシャイで会話が長く続かなかった」、「他の国の事情が少し分かったが、それ以外は特に何もなかった」、「高校生との交流の時間の方が多かった」という感想があった。このように、今回の課外研修がきっかけとなり、他キャンパスや他国の留学生との交流の輪が広がったことがうかがえる一方、グループ活動が大部分を占めたため、そのグループのメンバーとの交流以外は限定的な交流となった様子が見受けられた。また、高校生との交流が図れなかったため留学生と交流をせざるを得なかった学生やグループのメ

ンバーと打ち解けられなかった学生、日本語での交流が促進されなかった学生がいたことも分かった。

「今回の交流学習活動を通して学んだこと」についての留学生の感想は、「コミュニケーションの楽しさ」や「貴重な経験」、「自文化との違いの発見」、「地域の魅力発見」の4点が挙げられた。「コミュニケーションの楽しさ」に関する感想は、「高校生と交流する機会を得られて良かった。何人かは英語が話せてコミュニケーションも取ることができた。とても親切で優しく楽しい研修だった」、「日本の文化についても学習できて、我々は日本語を、高校生は英語を話す機会が得られて良かった」、「交流により安芸の生活、食べ物、交通機関について知ることができたし、日本語の上達も感じた」との意見が挙げられた。「貴重な経験」については、「じゃこ加工を見学し、その加工工程(天日干し)を実際体験できて良かった」、「絵付け体験で筆で絵を描くのは難しかったが、普段体験できないので良かった」、「絵付け体験は初めてだったが想像以上に楽しく、みんなと話しながらの体験はとても良い思い出になった」との感想があった。「自文化との違いの発見」に対しては、「絵付け体験を通じて日本の教育システムや日本人の芸術性、方法などを学んだ」、「絵付けの仕方を学び、その方法が国によって違うことが興味深かった」、「交流を通じて互いの文化や生活の違いを知ることができて友達にもなれた」、「安芸市は自分の住む南国市と景色が違っていた。高校生と安芸の素晴らしい景色、風、空気を歩きながら楽しめた」、「高校生は同じ高知県でも高知市内とは違う良いところを詳しく説明してくれた」という意見が見られた。「地域の魅力発見」については、「高校生と有名な野球場、野良時計、ちばさん市場等いろいろな場所に行き、安芸市の自然や生活様式を知ることができた」、「高校生の詳しい説明により、安芸市の長所を知ることができて、美しい自然を感じることもできた」、「長い距離を歩くのは疲れたが、森に囲まれ、川もあり、秋には葉が色づき自分の国にはない風景を見ることができた」、「町に住んでいる人は少なそうだったが、自然がきれいで、そこで生活している高校生たちはとても明るかった」、「途中で入った寺を訪れていた人が地図をくれて、すぐく人が温かい町だと感じた」、「町はとてもきれいで、海の幸、山の幸もあり、もう少し詳しい説明があれば、きっとこの町のことを好きになったと思う」という感想が挙げられた。以上のように、留学生にとっても今回の交流学習活動は、グループ活動によるまち歩きや絵付け体験での交流を通じてコミュニケーションの楽しさを学ぶとともに、自文化や自分の住んでいる

町との違いを発見し、地域文化の魅力について気づきが得られる貴重な経験となったと言える。しかし、景色や自然、文化の表面的な違いや魅力に注目をしていた留学生が大部分を占め、より深い生活様式や価値観の違いにまで考えが及ばなかったため、今後の交流学习活動の方法を吟味する必要性を感じる。

なお、「『安芸桜ヶ丘・安芸高等学校生徒との交流』と『高校生による安芸市ツアーガイド』、『内原野陶芸体験』の中で、どれが一番良かったか」との質問に対して、「安芸桜ヶ丘・安芸高等学校生徒との交流」が15名、「高校生による安芸市ツアーガイド」が28名、「内原野陶芸体験」が13名であり、留学生にとって安芸市の魅力を発見した高校生との交流学习が深い印象を残したことが読み取れた。

5.3 留学生と高校生との交流学习活動における考察

髙原町と安芸市にて行われた留学生と高校生との交流学习活動は、満足度がそれぞれ平均で4.8、4.7と非常に高い交流が展開されたことが分かった。その一方で、「グループ活動を通じた交流の深度」は、髙原町では留学生を中心として高校生と日本人学生の交流も推進され、特に、1対1のインタビュー活動を通して両者にとって異文化理解や言語運用能力、自文化への気づきが促され、互恵的な学びが得られたことが見受けられた。また、留学生にとっては、高校生に対して地域文化に関する聞き取りをすることで、地域の現状を学び理解を深め、地域の活性化への意見を有するに至ったことがうかがえた。一方、1対1によるインタビュー活動を取り入れなかった安芸市での交流活動は、高校生は留学生よりも高校生同士での交流が促進されたという結果となり、留学生の「地域理解の深度」も髙原町が4.3であったのに対し、安芸市は4.1とやや低い結果となって表れている。

また、交流学习活動の主体も髙原町は高校生が司会を含めた進行を担当し教員は活動を見守りつつサポートをしていたが、安芸市では皿絵付け体験やワークショップにおいて高校の教諭が主導し活動が実施されたため、高校生や留学生の主体的な深い学びにまで至らなかったと考えられる。ワークショップの最後の「安芸市の魅力を漢字一文字で表現」するグループごとの発表の際は、高校生が漢字の紹介や選んだ理由を発表していったが、留学生は一言も発しないというグループがほとんどであり、グループでの話し合いが高校生のみで実施されたという印象が否めなかった。

このような結果から、高校生と留学生の交流学習活動を推進し地域文化の理解を深めるためには、双方向型の密な交流が促される1対1のインタビュー活動等の言語運用による交流活動が不可欠であることが明らかになった。また、地域における交流学習活動では、送り出す大学側と受け入れる高等学校側が綿密に連絡を取り合い、企画時から協働でサポートする姿勢が問われる。交流学習活動を企画する際には、高校生と留学生の活動における役割分担を決め、彼らが主体となって活動を進めていけるような仕掛けを作る必要がある。そして、交流活動においては、両者が対等の立場で共通の目的の下、協働作業が進められ互恵的な学びが得られることが重要となる。さらに、一回限りの交流学習活動にはせず、両者が継続的な交流を持ち、互恵的な関係を維持することが求められる。

6. まとめと今後の課題

本研究では、2017年度に外国人留学生対象の課外研修において高大連携による地域文化体験を通じた交流学習活動を実施し、その教育効果について振り返りシートの結果を考察したところ、高校生と大学生の両者ともに主体的な深い学びが得られたことが分かった。そして、地域との互恵関係の構築を目指した高校生と大学生の双方向型交流モデルとしては、1対1によるインタビュー活動が重要な役割を果たし、それにより両者にとって異文化理解や言語運用能力、自文化への気づきが促され、互恵的な学びが得られたことが明らかになった。また、留学生にとっては、高校生に対して地域文化に関する聞き取りをすることで、地域の現状を学び理解を深め、地域の活性化への意見を有するに至った。一方、高校生にとっても、留学生との交流を通じて他文化の価値観に触れ、自文化に対する魅力を再発見し、地域に対する愛着や自信を深め、地域に貢献しようとする気持ちにつながっていくと考えられる。このような地域との交流学習活動では、送り出す大学側と受け入れる高等学校側が密に連絡を取り合い、企画時から協働でサポートする姿勢が問われるとともに、継続的な交流を持ち、互恵的な関係を維持することが求められる。

そこで、今後も引き続き、課外研修や体験型授業科目の中で高大連携による地域文化体験を通じた双方向型交流学習活動を実施していき、留学生を含めた大学生が「地域振興」や「観光発掘」をテーマに提言が行えるような教育活動となるべく交流内容を精査した上で改善を重ねていきたい。

付記

本プログラムは、大学から「大学機能強化促進経費」の支援を受け、実施された。

注

1. 壽原町は、「四季折々の豊かな自然に囲まれた高原の町」であり、「町面積の91%を森林が占め、標高1455mにもなる雄大な四国カルストに抱かれた自然豊かな山間の小さな町」である。「四国カルスト高原は、全国的にも珍しい高位高原カルスト地形になっており、至る所に手付かずの自然が残り、晴れた日などには太平洋から瀬戸内海まで一望でき」とのことである。

「雲の上の町ゆすはらHP」<http://www.town.yusuhara.kochi.jp/> (accessed 2018.12.20)

2. 安芸市は、「高知市から東へ約40キロに位置し、南は土佐湾に面し、北は四国山地を背にする美しい自然に囲まれた県東部の中核都市であり」、「全国最大級の施設園芸地帯として、ナスなどの環境保全型農業に取り組んでおり、柚子、チリメンジャコの産地、明治時代の野良時計、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された土居廓中の武家屋敷群、岩崎彌太郎生家と三菱グループ源流の地、書道・童謡・陶芸のまち、阪神タイガース・大学・高校野球のキャンプなど、歴史と文化の香るまち、スポーツキャンプのまちとして、全国に情報発信し」ている。
「安芸市HP」<https://www.city.aki.kochi.jp/life/dtl.php?hdnKey=674> (accessed 2018.12.20)

3. 「地域文化・観光体験調査」の被験者となった外国人留学生は、2016年5月1日現在、高知大学に在籍していた留学生である。
4. 高知大学には3つのキャンパスがあり、高知市内の朝倉キャンパスには人文社会科学部・教育学部・理工学部・地域協働学部の4つの学部が、高知市の隣の南国市には、岡豊キャンパスに医学部が、物部キャンパスに農学部があり、それぞれのキャンパスで留学生が勉学に励んでいる。

参考文献

- 生駒佳也・Gehertz三隅友子(2013)「地域の国際化を目指す高大連携の可能性Ⅱ—とくしま異文化キャラバン隊の活動を通して—」『2012年度徳島大学国際センター紀要・年報』、pp.35-49
- 大島まな・田村知子(2001)「留学生を活用する国際教育の内容・方法と教育効果に関する研究」『生涯学習研究センター紀要』第6号、pp.59-80
- 大塚薫・林翠芳(2016)「日韓中協定校体験型プログラムの実践と課題—高知文化事

- 情に触れる体験を通して」『韓国日本語学会第33回国際学術発表大会論文集』、pp.100-105
- 大塚薫・林翠芳 (2017)「グローバルな視点に基づいた体験型プログラムの構築—地域文化・観光体験調査の結果を通して—」『韓国日本語学会第35回国際学術発表大会論文集』、pp.115-120
- 大塚薫・林翠芳 (2018)「インタビューによる地域住民との交流を主軸とした体験学習型授業の構築」『第23回JAISE年次大会（研究大会・総会）proceedings』、pp.#32-5-1-2
- 梶井一暁 (2011)「大学と学校の連携による四国遍路歩き実践に関する研究—遍路を活かした人間形成プログラムの開発に向けて—」『鳴門教育大学研究紀要』第26巻、pp.20-33
- 坂口昌子・村山弘太郎 (2018)「日本語コミュニケーション力を高める授業実践—日本人高校生と外国人日本語学習者の協働学習から—」『研究論叢』90、国際言語平和研究所、pp.153-164
- 佐々木陽子 (2001)「留学生と高校生との共同作業による国際理解学習—体験学習としての教育交流—」『南山大学国際教育センター紀要』第2号、pp.82-98
- 佐藤勢紀子・末松和子・曾根原理・桐原健真・上原聡・福島悦子・虫明美喜・押谷祐子 (2011)「共通教育課程における『国際共修ゼミ』の開設：留学生クラスとの合同による多文化理解教育の試み」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第6巻、pp.143-156
- 宮本美能 (2010)「『小学校外国語活動』のカリキュラム案とその実践：学習の方法、内容、環境について考察する」『多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集』14、pp.71-80
- 宮本美能 (2011)「多言語・多文化授業環境を生かした国際理解教育の実践：大学生と高校生の交流会における—考察」『多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集』15、pp.61-68
- 林翠芳・大塚薫・ガルシア デル サス エバ (2017)「体験学習を通じたアクティブ・ラーニング型授業の構築」『高知大学留学生教育』第11号、pp.77-90

おおつか かおる

(高知大学国際連携推進センター国際連携教育部門准教授)

LIN Cuifang

(高知大学国際連携推進センター国際連携教育部門教授)